

## 〔研究会〕

## 第9回東日本学園大学口腔外科学研究会

日時：平成4年2月22日（土）13：30～

会場：東日本学園大学 P1 講堂

主催：口腔外科学教室

## 特 別 講 演

## 唾液腺造影法について

口腔外科学第二講座  
助教授 有末 眞

唾液腺造影法（唾影法）とは唾液腺の導管開口部より造影剤を注入してX線撮影を行い、得られたX線像を観察することを言い、得られたX線像を唾液腺造影像（唾影像）と呼んでいる。対象としては、その解剖学および技術的な理由から耳下腺、顎下腺に行われ、唾液腺自体の疾患の診断に主に利用されている。また唾液腺周囲の病変についても、その病変が唾液腺に及ぼす影響を観察することができ、傍唾液腺疾患の診断や、さらに水溶性造影剤を使用した際に見られる造影像の希薄化を利用しておおその唾液腺分泌機能の診断にも有用である。しかし同一の唾液腺が撮影体位、造影剤の種類、造影剤の注入量、注入速度、X線撮影の時期、撮影条件など種々の条件により多様な唾影像を呈し、診断価値の高い唾影像を得ることは必ずしも容易ではない。唾影像上に現れる病的変化としては、管系像では管走行の異常、断絶、

中断、淡化、伸展、末梢導管の消失、拡張、狭窄、導管内および管内壁の異常などがあり、腺系像では変形、変位、萎縮、腫大、斑紋化、点状および小円形陰影、無影、漏洩などがある。また機能像では希薄化あるいは消失の遅延などが認められる。唾影像の読影にあたっては、得られたX線写真の評価はもとより、造影剤の種類、撮影時の注入量、撮影の時期などに関する情報が必要であり、また一時点の撮影だけでは唾液腺の詳細な変化を観察するには困難な場合が多い。唾液腺造影法は他の画像診断法に比べ、唾液腺の微細な変化を観察するうえでは優れているが、欠点および限界もある。唾液腺疾患の診断に際しては問診、視診、触診はもとより、様々な診断技術が急速に進歩している現在、それぞれの診断法の特徴を十分に理解し、各検査法を必要に応じ組み合わせ診断にあたるべきではないかと思われる。

## 一 般 講 演

1. 自然発症肝炎・肝癌ラット（LECラット）における  
着色歯牙の検索 第一報 病理組織学的検討口腔外科学第二講座  
渡辺 一史

〔目的〕LECラットは4ヵ月齢で約90%に急性肝炎を発症し黄疸を呈し約半数は死亡する。一方、残り約半数は慢性肝炎に移行し肝硬変、肝癌へと推移してゆく。これら黄疸を発症し生き残ったラットのうち、約20%に黄疸

発症後2～3週目に緑色の切歯が萌出する現象を我々は観察した。そこで、今回、この着色歯牙の成因を検索するために着色歯牙の病理組織学的検討を行なった。

〔材料・方法〕黄疸発症後2～3週の着色歯牙を有する